

グローバル人材に問う!

～「グローバル」に活躍するには?～

グローバル化はもはや他人事ではない

▼プロ野球・大谷選手が米国のロサンゼルス・エンゼルスへ移籍▼世界遺産・奈良県興福寺の中金堂の再建にアフリカ・カメルーン産の材木を利用▼名古屋の鉛工房が発信したSNS動画を見て、海外から注文が入る。



「グローバル化」「グローバル社会」による現象を無視できない社会の中で、私たちは生活しています。グローバル化(Globalization)^{*1}は、国境を超えた「つながり」を私たちにもたらす一方で、貧困や格差、移民・難民、環境悪化などの地球規模の課題や、多文化共生、貿易摩擦、個人情報の流出など、それによってもたらされる課題や問題があることも事実です。

外国語コンプレックスが生み出す「誤解」

このような社会情勢において、「国」という境を超えて活躍できる「グローバル人材」が各分野で期待されています。「グローバル人材」と聞くと、「海外に展開する大企業で世界を駆け回るビジネスパーソン」を想像しがちですが、その分野は実に多岐にわたります。

政府の「グローバル人材育成推進会議中間まとめ(平成23年6月)」によれば、「グローバル人材」の概念は、以下の3つの要素に整理されます。

- 要素Ⅰ： 語学力・コミュニケーション能力
- 要素Ⅱ： 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
- 要素Ⅲ： 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

要素Ⅰに挙げられている「語学力」について、TOEFL^{*2}スコアの国別ランキングを見ると、日本は163か国中135位(アジアでは30か国中27位)。「語

TOEFL(iBT)の国別ランキング ※スコアは120点満点 <全体順位>(163か国中)

順位	国名	スコア
1	オランダ	100
2	デンマーク	99
3	シンガポール、オーストリア	98
80	韓国	81
105	中国	77
135	カメルーン、トーゴ、クウェート、 日本	70
139	ギニア、シエラレオネ	69
163	モーリタニア	58

出典:「グローバル人材の育成について」(文部科学省発表資料)

学力)に対するコンプレックスから、「外国語をマスターすれば」「海外留学すれば」国境を越えてグローバル社会で活躍できるのでは、と誤ってしまいがちです。

一方、世界中で「地球市民教育」のプロジェクトに関わり、講演やワークショップ等を行っているマーク・ガーゾン(Mark Gerzon)によれば、グローバル人材に求められる4つの能力を、「**直視する力・学ぶ力・連**

帯する力・助け合う力」としています。^{*3}「**地球市民**」とは、**世界の他の地域で起こっている事象や問題等に対し、自分や自分を取り巻く地域のこととして感じられる市民**のこと。活躍の場が日本であれ海外であれ、グローバルな視点で課題を自ら見つけて行動することのできるこの「地球市民」意識をもった人物こそが、世界を自分のフィールドとして広げていける総合的な「人間力」を備えたグローバル人材だと言えるのではないでしょうか。

次頁からは、この地域でグローバルに活躍されているみなさんをご紹介します。

*1 人、物材、情報の国際的移動が活性化し、様々な分野で「国境」の意義があいまいになるとともに、各国が相互に依存し、他国や国際社会の動向を無視できなくなっている現象。(参考:文部科学省「グローバル化と教育に関して議論していただきたい論点例」)

*2 読み方はトーフル。英語を母語としない人が、大学の授業で聞き、話し、読み、書く英語を使用し、理解する能力を測定するもの。世界全域で受験できる。(参考:ETS TOEFL)

*3 参考:「世界で生きる力～自分を本当にグローバル化する4つのステップ～」英治出版株式会社

平昌、東京、そしてパリへ

～オリンピックで通訳ボランティア～

名古屋外国語大学 外国語学部 フランス語学科4年
野山 愛友さん

英語の勉強が好きで「いずれは様々な言語を話せる人になりたい」と思っていた野山さんは、スポーツ少女で小・中・高と運動部に所属。ある時、「オリンピックでは英語よりも仏語(フランス語)が第一公用語として優先される」と知り、大学では仏語を選択しました。



▲会場では通訳として活躍(写真右が野山さん)

大学1年次、全国7つの外国語大学による「全国外大連合」の通訳ボランティア育成セミナーを経てボランティアバンクに登録。そして2年次、「第8回アジア冬季競技大会」(開催地・札幌)に英語通訳ボランティアとして初めて参加し、スリランカのスタッフに付き添う機会を得ました。スポーツ選手達の姿に感動したのはもちろん、自分の得意分野を活か

して人の役に立てた喜びを忘れられず、今年2月、今度は韓国・平昌オリンピックへ。仏語通訳としてスピードスケートを担当し、活動では仏語・英語だけでなく、時には韓国語・中国語を現地のボランティア仲間に教わりながら、観客の誘導や情報提供など、自らできることを探ったそうです。1か月の滞在期間中、宿舎で仲良くなった韓国人の仲間との交流を通じて韓国の文化や風習・価値観を知り、その後も連絡を取り合うほど大切な友人となりました。

「ボランティア通訳の経験を通して、文法や言葉の完璧さよりも、「話したい」「伝えたい」という気持ちの方が大切だと気づきました」と野山さん。「チャンスがあれば、2020年の東京オリンピック、2024年のパリオリンピックで仏語通訳として参加できれば」。また一步、夢に近づく野山さんの姿が目に見えそうです。

グローバルに活躍するには?
一步踏み出す勇気と情熱。
飛び込んでいく行動力。



サッカーが広げてくれた、僕の世界

Mizkan Holdings Co., Ltd.
Marketing Manager, New Business Development Team

長谷川 乃亜さん



▲子ども達に指導する長谷川さん

小学生の時にJリーグが開幕、海外で活躍する三浦知良選手に憧れた長谷川さん。高校時代、Jリーグユースチームでのプレーを経て、大学時には海外へのチャレンジを決意。自身のサッカーのスタイルや大学で学んだスペイン語を試す機会として、平成15年にメキシコ・レオン州に渡りました。

「振り返ると無鉄砲だったと思いますが」、履歴書持参、アポなしでクラブハウスに向き、入団テストに挑戦。チームメイトの家族宅に下宿しながら2つのチームでプロとしてプレーする夢を叶えました。しかし契約延長は難しく、ドイツでのテスト挑戦を最後に、21歳でプロとしてサッカーに向き合うことをやめました。

帰国後、(株)ミツカンに就職。仕事以外でやりがいを探していた頃、NICの事業「九番団子どもサッカー教室^{*1}」のボランティアに関心を抱きます。「子ども達の

居場所づくりを目標とする社会的価値がある活動だと思って」。サッカーをきっかけに、子ども達の学校生活が楽しくなり、コミュニケーションの助けになればと、8年間にわたり積極的に活動に関わりました。

平成26年、同社のブランドマネージャーとして渡英。3年間の勤務を経て、現在は米国でマーケティングマネージャーを務める長谷川さんですが、海外赴任当初は全く英語ができなかったそうです。英語で思うように伝えられないからこそ、「何を議論すべきかはっきりと伝える」よう意識したと言います。「たまに厳しいことも言うけれど、常に敬意は忘れず、終われば肩をたたき合う潔さはスポーツに似ているかも。日本の常識が通用しない海外では、多様性を受け入れ、公平に接し、論理的に話を進めながら自身の専門性も磨く。『自分が海外にいる意義や価値』を突き詰めるのが大事」と語りました。

グローバルに活躍するには?
専門性を磨き、自分の価値を
突き詰めることが大事!



*1 外国人児童の居場所づくりと日本人児童との交流を目的に、ブラジル人集住地域である港区内の小学校校庭でNICと「九番団日本語教室」が協働で平成15年から実施。平成29年から「九番団日本語教室」のみの運営となっている。